

仏心と葬弁儀 ーその16ー

苦難の創業時代

よく「企業は人である」と言われます。「創業は易し、守成は難し」という言葉にも象徴されるように、企業が発展するのも衰退するのも、企業を支えてくれている社員・スタッフのやる気や能力に負うところが大きいということば、まさに真理といえるでしょう。

いささか古い話になりますが、昭和43年7月10日に丸和堂は設立されました。しかし、右も左も分からないその道の素人が、葬儀業を始めてすぐに依頼が舞い込むほど、商売は甘いものではありませんでした。すでに市内に何軒かあった同業者がガッチリとシェアを握っており、さまざまな情報網を確立している中へ新たに割って入ることは、まさに至難の業だったのです。

そんな苦難の創業時代を送っていた飛田でしたが「捨てる神あれば、拾う神あり」のたとえ通り、一年ほどして初めての仕事が舞い込んできました。当時、製紙工場に勤めていた男性の父親が重病を患い、先が長くないと聞いた、同じ会社に勤める飛田の友人が「もし葬儀となったら、丸和堂にやらせてやってくれないか」と頼み込んでくれたのです。

仏縁による出会い

この時の経緯は、以前にも当コーナーでご紹介いたしましたので詳細は割愛させていただきますが、この時の喪主が、やがて丸和堂の専務として飛田が右腕として絶大な信頼を寄せたTさんだったのです。まさに仏縁と呼びたくなるような「奇しき因縁」によるものでした。

そんな初仕事は、Tさんの協力もあって滞りなく終了し、飛田もほっと安堵の胸をなでおろすことができました。「祭壇など、葬儀の道具はすべて新しいものばかりでしたが、何より葬儀を無事に終了できたことがうれしかった。あの時の感動は今でも忘れることができません」と飛田は当時を述懐します。

このことがあって、Tさんに深い敬愛を感じた飛田でしたが、まさか後に当人を自社の役員として迎え入れることになるうとは、神ならぬ身の知る由もないことでありました。やがてこの初仕事呼び水となって、徐々に丸和堂に対する仕事の依頼が少しずつではありましたが増えていくようになっていったのでした。

ー つづく ー

■ 次回の掲載は12月19日(土)を予定しております。